

名古屋市の小学校におけるランチルーム

2. 児童の評価, 要望について

宮崎 幸恵*¹ 鈴木 博志*²

School Lunch Room in Nagoya City

Part 2 Estimations and Needs by School Children

Sachie Miyazaki and Hiroshi Suzuki

1. 研究の目的

前報¹⁾では, 名古屋市内の小学校で給食のために特別に設けられた部屋, すなわちランチルーム (以下 LR と略す) を取り上げ, LR の施設・設備の形態や利用状況を報告した。本報では, LR に対する児童の評価や要望を通して LR の施設・設備環境を改善するための指針を得ることを目的にしている。

2. 研究の方法

2-1 分析対象の枠組み

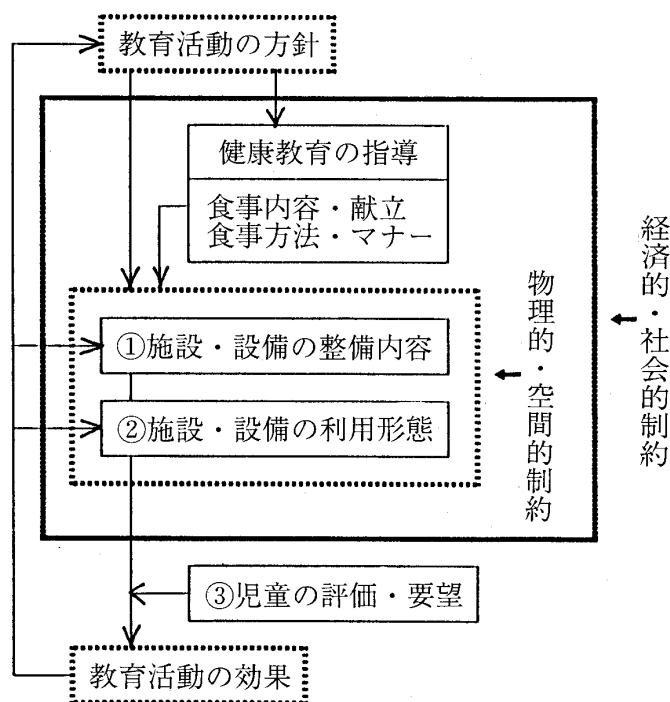
本研究では, LR の施設環境の整備に関わる項目を図1のように設定している。①および②の項目については, 前報¹⁾で分析している。本報の主要な分析対象は, 図中の③児童の評価・要望の項目であり, 施設・設備の内容や利用形態に対する児童の評価・要望を示している。LR の食事空間や使い易さに対する児童の評価・要望を通して, LR の施設・設備の問題点の把握や改善の方向性を検討する。

2-2 分析資料

本研究を進めるための資料は, 名古屋市教育委員会が作成した余裕教室の統計資料, およびそれをもとに実施した LR の観察・ヒアリング調査¹⁾と児童へのアンケート調査である。

* 1 : 東海学園女子短期大学生活学科

* 2 : 名城大学理工学部建築学科



- ③が本研究における分析対象の項目
 ①, ②は観察・ヒアリング調査を実施 (既報¹⁾参照)
 ③はアンケート調査を実施

図1 LRの関連項目と分析対象

(1) アンケート調査

図2は、LRを有する小学校と調査対象校の位置を示したものである。LRを有する小学校は各区1～5校あり、名古屋市全体からみればほぼ均等に分散している。このうち、アンケートの調査対象に選出した小学校は、LRを持つA～D小、LRを持たないE、F小の計6校とした。

表1は、アンケート調査対象校であるA～F小の概要、表2は、LRを有するA～D小のLR施設整備の概要を示している。LRを有するA～D小を調査対象校に選出した理由は、表中に示されるように各学校によってLRの空間(規模、位置)、改修状況(程度、場所)、内装(照明、テーブル、イス)、設備(洗面台、配膳台)、使用状況(頻度、会食)がそれぞれ異なっていることにある。これは、A～D小のLR環境が基本的に相違していることから、その相違が児童のLRの評価にどのように影響・関係しているかを比較・考察することが可能となり、併せてLR環境の問題点や改善課題を検討できることを意図したことによる。ただし、児童の物の見方や考え方は、成人の場合より狭く直観的なため、必ずしも事物の対象を客観的に把握した上で評価しているわけではない。アンケート調査の結果を読み取る場合、この点に留意する必要がある。他方、LRを有しない学校は、LRのある調査対象校の近くの学校を無作為に選出した。アンケート調査は、質問項目に関する理解力が比較的高い5・6年生に限定し、回答しやすい選択式の質問形式とした。調査対象校の児童数は、A～D小では416名(全員)、E、F

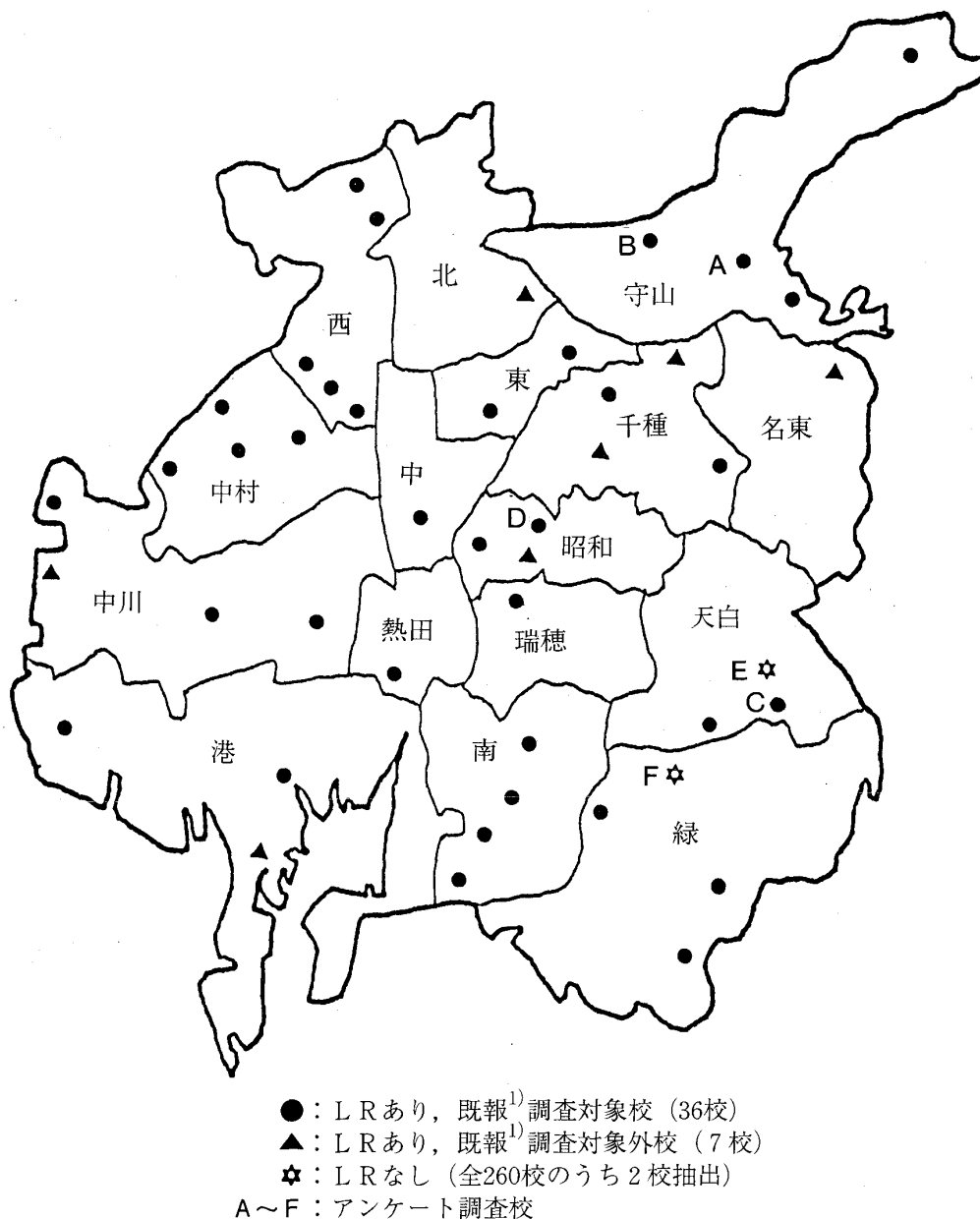


図2 LRを有する小学校と調査対象校の位置

小では263名（全員）である。調査実施時期はC，E小では1994年9月，A，B，D，F小では1995年6～7月である。

調査内容は，表3に示されるように統計で19項目になり，LRを持つ学校と持たない学校とで質問項目の構成が異なる。質問内容は，LRの広さ，内装，評価，照明，位置等の施設や設備の評価・希望，LRでの食事回数，人数，時間，異学年交流会食の利用状況などの評価・希望，LR以外での食事場所やLRの設置要望など多岐にわたる。すでに表3に示されているように，各学校の調査内容は，学校側の調査への協力体制，LRの有無，LRの施設・設備の相違などにより必ずしも同じではない。そのため，以後の図表では，調査不可能な項目に該当する学校の

表1 調査校の概要

	A小* ¹	B小* ²	C小* ³	D小* ⁴	E小* ⁵	F小* ⁶
地 区	守山区	守山区	天白区	昭和区	天白区	緑区
学 級 数	1	18	15	15	23	17
5-6年の学級数	8	6	6	6	8	6
5-6年の1クラス 平均児童数	4	32	29	31	38	33
LRの有無	有	有	有	有	無	無
LRの転用前の教室* ⁷	普通教室	普通教室	特別教室	特別教室	—	—

*1:大森小 *2:白沢小 *3:しまだ小 *4:吹上小 *5:原小 *6:戸笠小
*7:いずれも余裕教室

表2 A～D小のLRの概要

	A小	B小	C小	D小
使い方	専用	専用	専用	専用
規模* ¹	1.5	1	1.5	1.5
数	1	1	1	1
位置	南北棟 1階	南北棟 1階	東西棟 4階	東西棟 3階
改修程度	全面改修	全面改修	一部改修	未改修
改修場所	床・壁・天井	床・壁・天井	壁・天井	—
照明	改修	改修	改修	未改修
テーブル	購入	購入	購入	教室と同じ
イス	購入	購入	購入	教室と同じ
洗面台の 設備	有	有	有	無
配膳室	有	無	無	無
LRの使用 頻度* ²	5～6	5～6	5～6	9～10
ペア会食* ³	有	無	無	有

*1:規模1とは7m×9mの普通教室 規模1.5とは15m×7.2mの特別教室

*2:1クラスあたり年間平均使用回数

*3:ペア会食とは異学年交流会食

表3 調査実施校と質問項目の対応関係・対応図

No	調査項目	LR 有				LR 無		対応図
		A小	B小	C小	D小	E小	F小	
1	LRの広さの評価	—	○	○	○	—	—	図3
2	LRの内装の評価	○	○	○	○	—	—	図4
3	照明の明るさ	○	○	○	○	—	—	図5
4	照明のデザイン	○	○	—	○	—	—	図6
5	テーブルの評価	○	○	—	○	—	—	図7
6	イスの評価	○	○	—	○	—	—	図8
7	食器類の満足度	○	○	—	○	—	—	図9
8	洗面台の場所の希望	○	○	—	○	—	—	図10
9	配膳室の必要性	○	○	—	○	—	—	図11
10	食事する部屋の希望	○	○	○	○	—	—	図12
11	LRと教室の選択理由	○	○	—	○	—	—	図13
12	LRと調理場の距離	—	○	—	○	—	—	図14
13	LRと教室の距離	—	○	—	○	—	—	図15
14	LRでの食事回数	○	○	—	○	—	—	図16
15	LRでのペア会食の評価	○	○	—	○	—	—	図17
16	給食を食べたい場所	○	○	—	○	—	—	図18
17	一緒に食べる人数の希望	○	○	—	○	—	—	図19
18	給食時間の長さ	○	○	○	○	○	○	図20
19	LRの設置希望	—	—	—	—	○	○	図21

○：調査　—：未調査

データは除いている。なお、集計結果は、SPSS法により X^2 検定を行った。

3. 調査結果および考察

児童のLRに対する評価、要望

(1)LRを持つ小学校の比較

LRの広さの評価についてみると(図3)、B、C、D小のいずれの児童も「適切」であると

する回答が6割前後と最も多いが、逆に「狭い」と感じている児童も2～4割を占める。特に普通教室1室分の広さしかないB小（C小，D小とも1.5室分）では、「狭い」が約4割と多い。配膳作業に要するスペースを考え併せると，1クラス相当の人数が会食する場合には少なくとも普通教室1.5室分以上の広さが必要とされる。食事空間（LR）の広さを学習空間（普通教室）の広さと同じ尺度で設置計画を立てる従来の考え方を再検討する必要があるだろう。

LRの内装（床・壁・天井）の評価については（図4），改修状況に応じて児童の評価が大きく変わる傾向にある。すなわち，全面的な改修を実施しているA，B小では「気に入っている」とする回答が8割前後と多いが，一部改修のC小で約5割，未改修のD小で約3割に減少する。改修の程度が，児童の評価に端的に反映されている。

LRの照明の明るさについては（図5），「適切」と回答した児童が約4割を占める。これは，オレンジ色のフード付きペンダント型の半直接照明器具のため，光を直接受ける箇所は明るいものの，室内全体として暗い感じを与える採光の仕方にあると考えられる。LRの照明デザインでは（図6），照明を改修したA，B小の2校で6割以上の児童が「良い」と回答している。この点，未改修のD小では，「良くない」が約6割を占め，改修を実施した学校との間で大きな差異が表れている。

テーブルの評価については（図7），LR用に新規に購入したA，B小で6割以上の児童が「気に入っている」と回答している。しかし，普通教室と同じ机を代用しているD小では，逆に6割以上が「気に入っていない」としており，A，B小との差異が明瞭である。イスの評価では（図8），テーブルの評価と同様に新規購入校のA，B小と未購入校のD小とで大きな差異がみられる。「気に入っている」と回答する児童の割合は，A，B小の方が高い。

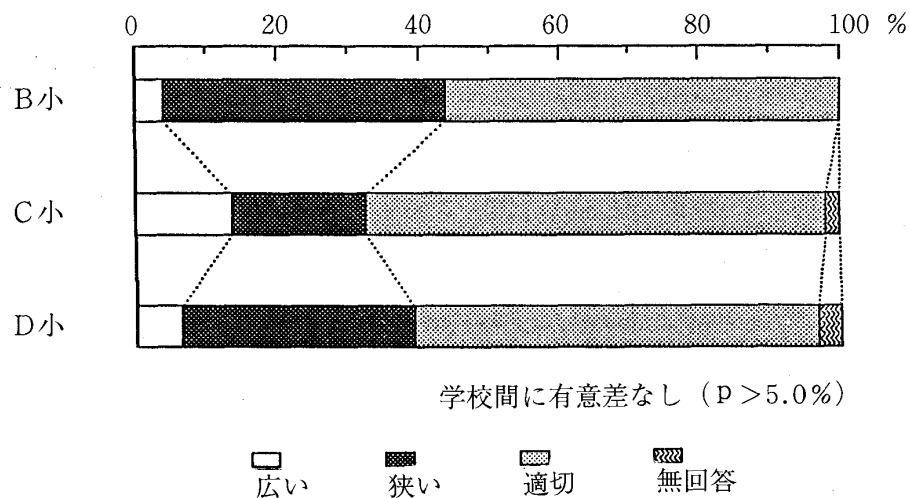


図3 LRの広さの評価

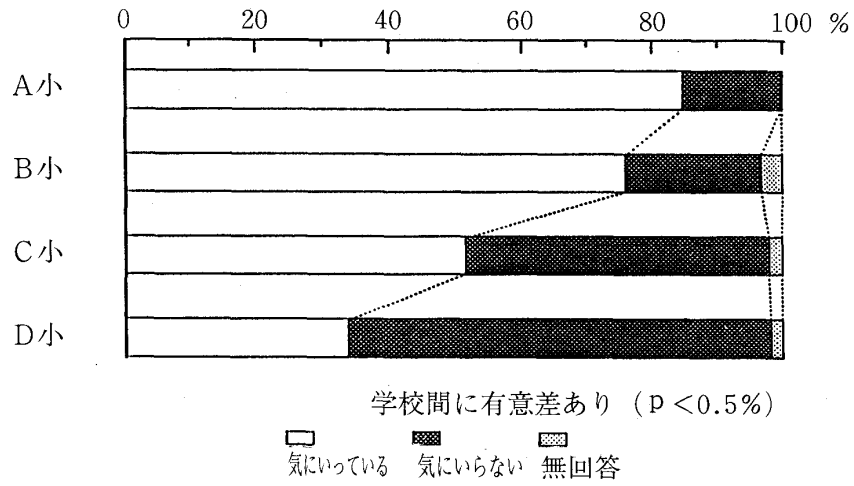


図4 LRの内装の評価

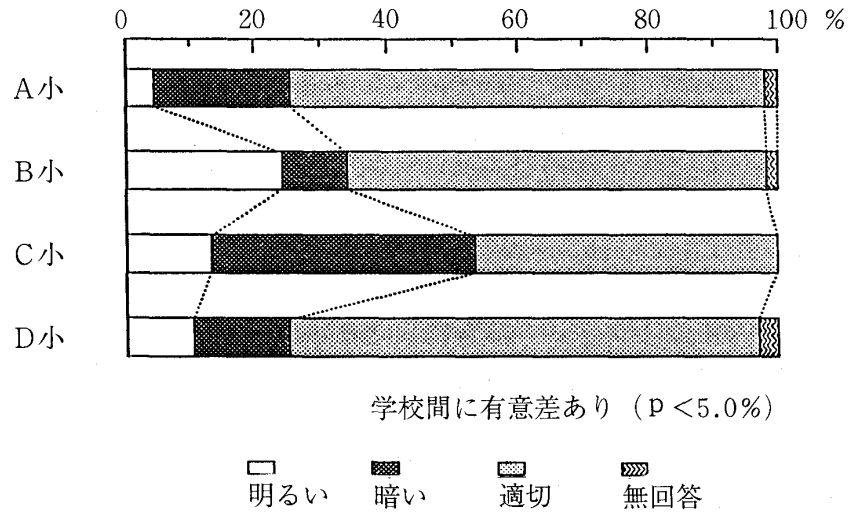


図5 照明の明るさ

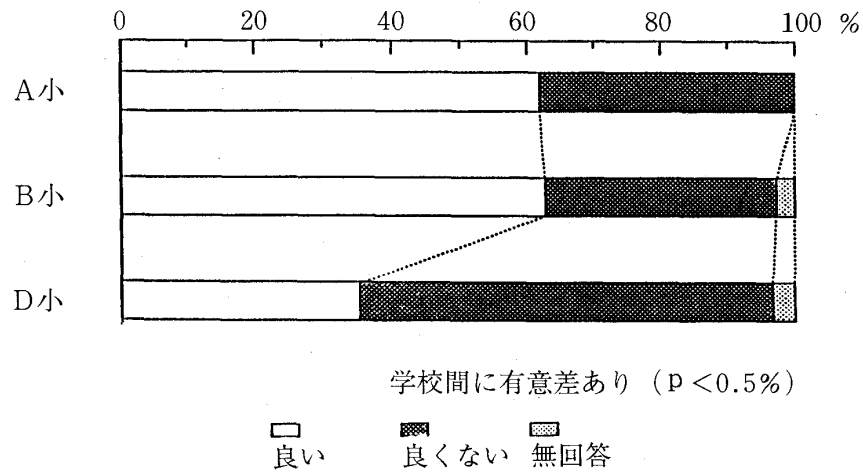


図6 照明のデザイン

LRで使用している食器類の満足度については(図9),強化磁器食器を使用しているA,B小の2校は「満足」が約8割と多い。アルマイト製食器を使用しているD小では「満足」より「不満足」が6割近くを占め,A,B小との差異が歴然としている。児童の評価が高い強化磁器食器は、「見た目が美しい」、「熱が伝わりにくい」というメリットを持つが,反面「重い」、「割れやすい」、「洗浄に手間がかかる」などのデメリットもある。こうしたデメリットを解消することが課題として残される。

手を洗う洗面台の場所の希望では(図10),A,B,D小のいずれも「LRの室外」と回答する児童が5~7割と多い。洗面台の設置場所としては,給食の準備→食事→片付けの作業の流れを想定すると,LRの室内の方が合理的と考えられるが,児童の設置希望は必ずしも「LRの室内」の回答が多いわけではない。A小では,既にLRの室内に洗面台が設置されているが,室内に設置されていないD小より「LRの室外」を希望する割合が多く表れている。

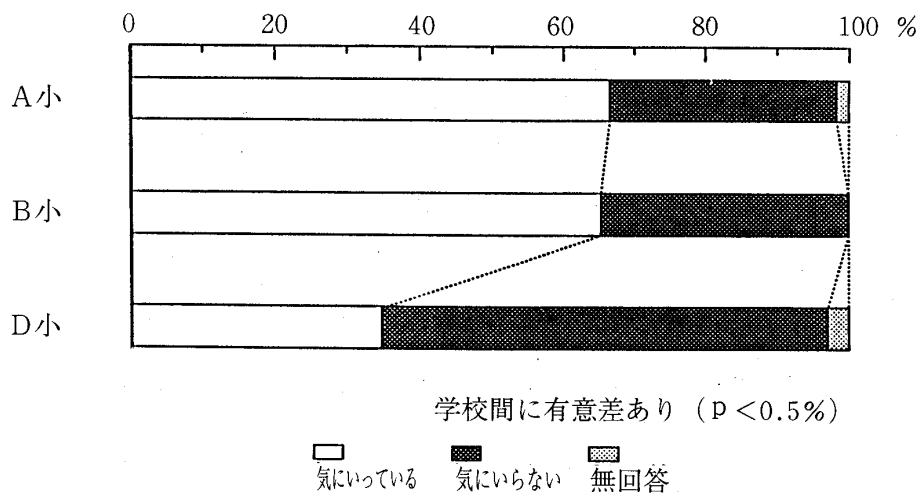


図7 テーブルの評価

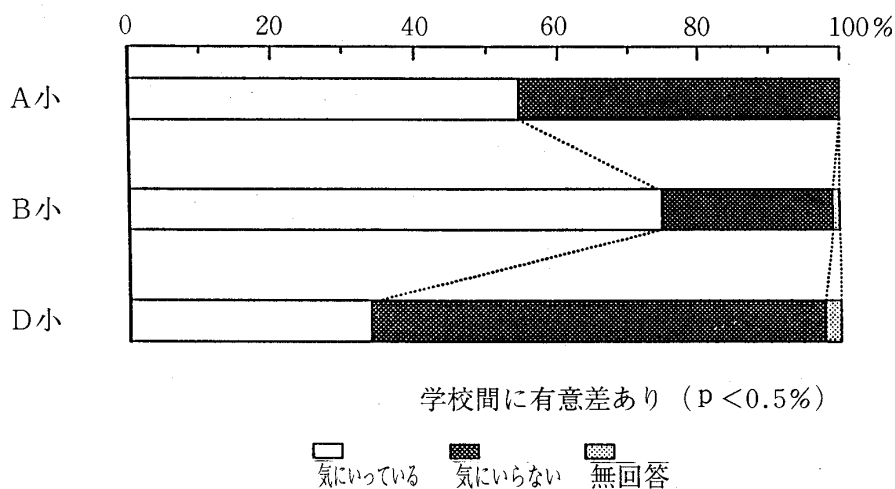
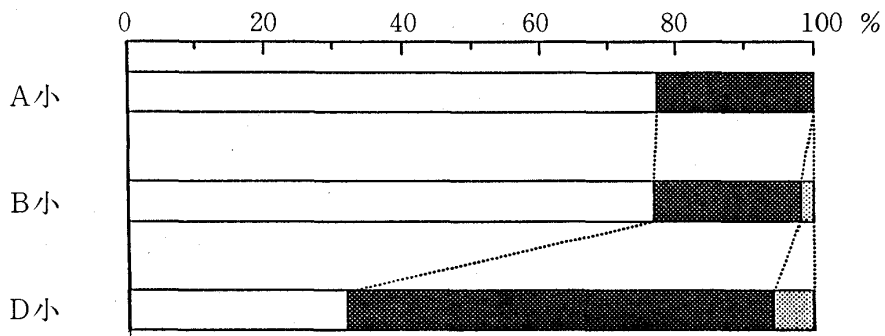


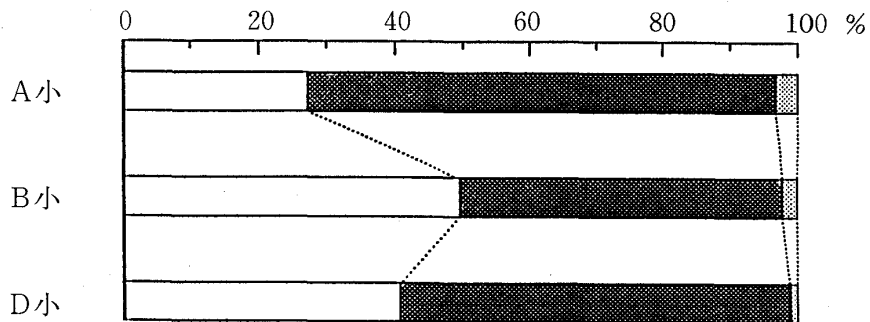
図8 イスの評価



学校間に有意差あり (p < 0.5%)

□ 満足 ■ 不満足 ▨ 無回答

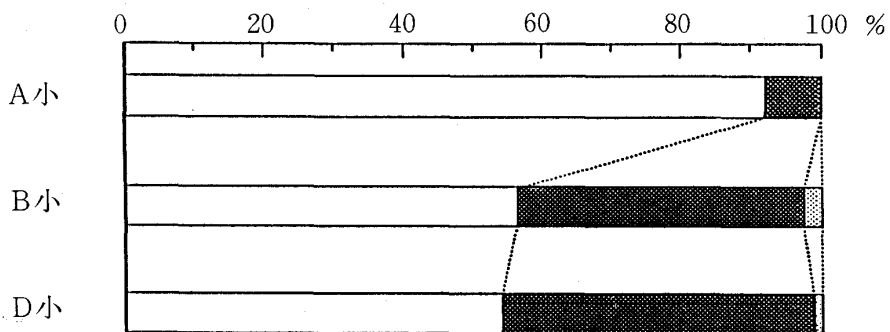
図9 食器類の満足度



学校間に有意差なし (p > 5.0%)

□ LRの室内 ■ LRの室外 ▨ 無回答

図10 洗面台の場所の希望



学校間に有意差あり (p < 0.5%)

□ 必要 ■ 不必要 ▨ 無回答

図11 配膳室の必要性

配膳室の必要性については（図11）、A、B、D小のどの学校も「必要」とする児童が半数以上を占める。特にLRに隣接して配膳室を所有しているA小では、所有していないB、C小に比べ、「必要」とする割合が群を抜いて高い。これは、配膳室を実際に使用しているA小の児童が、その利便性を実感した結果を直接反映したものと受け取れる。

給食を食べる部屋の希望については（図12）、B、C小では「LRがよい」とする児童が約55～65%と多く、A小が40%弱に留まる。さらにD小では「LRがよい」とする児童よりも「教室がよい」とする児童の方が多くみられる。これは、D小のLRだけは、特別教室からの転用時にほとんど改修の手が加えられておらず、普通教室とLRの環境に大差がないことに起因していると考えられる。続いて、「LRがよい」と回答した児童の理由をみると（図13-1）、A、D小では「気分が変わる」の回答が最も多く、「楽しい」、「きれい」の順となる。これに対し、B小では、「きれい」と回答した児童が多い。他方、「教室がよい」と回答した児童の理由をみると（図13-2）、いずれの学校でも「移動がない」が最も多く、ついで「楽しい」と続く。先のLRを選択した理由の場合とは異なり、「きれい」を理由にあげた児童は皆無である。これらのことから、給食時には、学習環境とは異なる雰囲気を求めていること、きれいな場所で食事をしたい意向のあること、移動の有無が及ぼす影響などが読み取れる。

調理室とLRの距離の評価については（図14）、B小では「今のまま」と回答した児童が約7割と多い。しかし、D小では逆に「もっと近く」と回答した児童が約6割を占める。これは、B小のLRは1階にあり、かつ調理室にも近い（距離約20m）が、D小のLRは3階で調理室から離れている（同様に約30m）ため、こうした距離の差が児童の意識に反映したものと理解される。普通教室とLRの距離の評価については（図15）、B小では「もっと近く」と回答した児童が5割強を占める。D小では「今のまま」と回答した児童が約8割と多い。これも、B

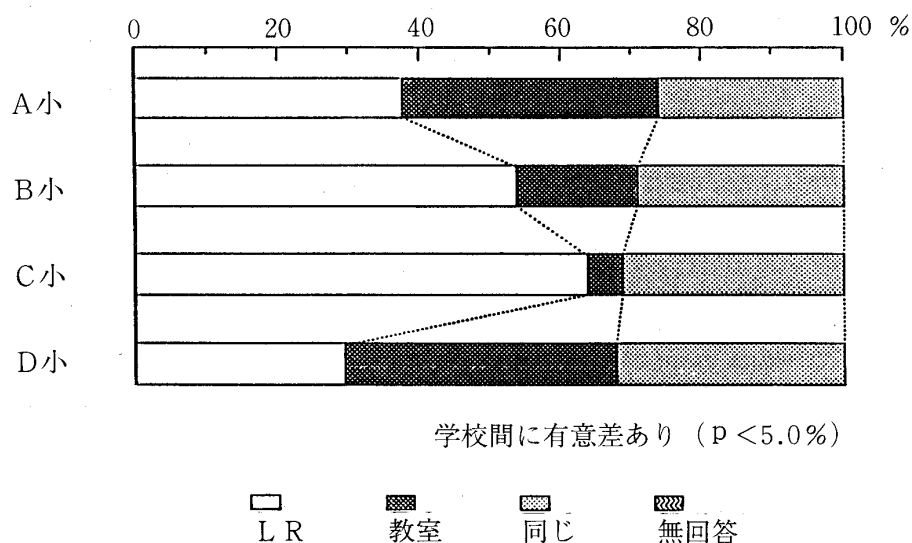


図12 食事をする部屋の希望

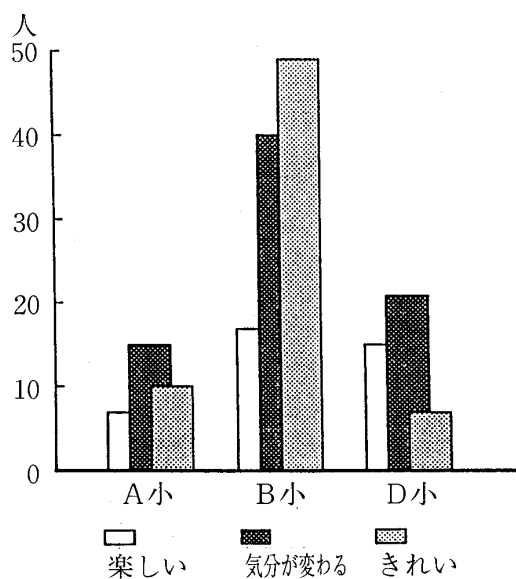


図13-1 LR を選択した理由

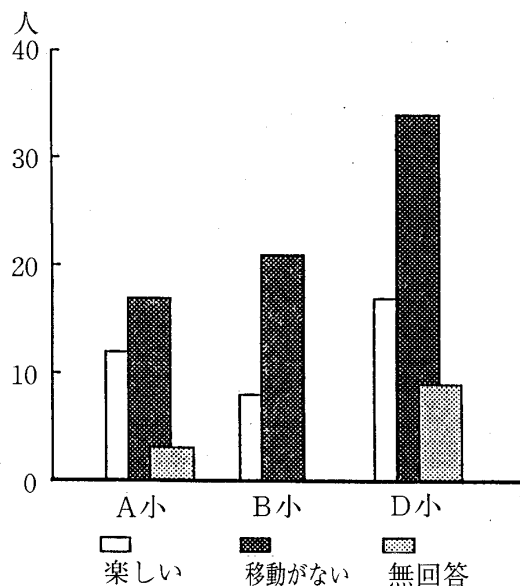


図13-2 教室を選択した理由

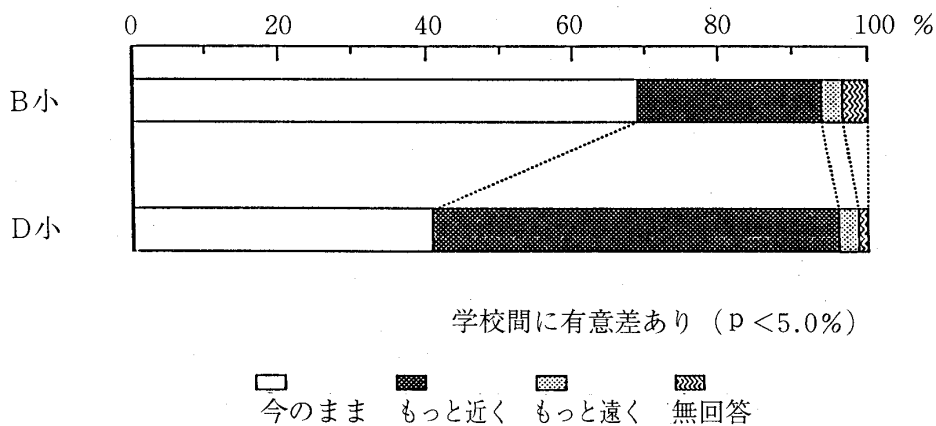


図14 LR と調理場との距離

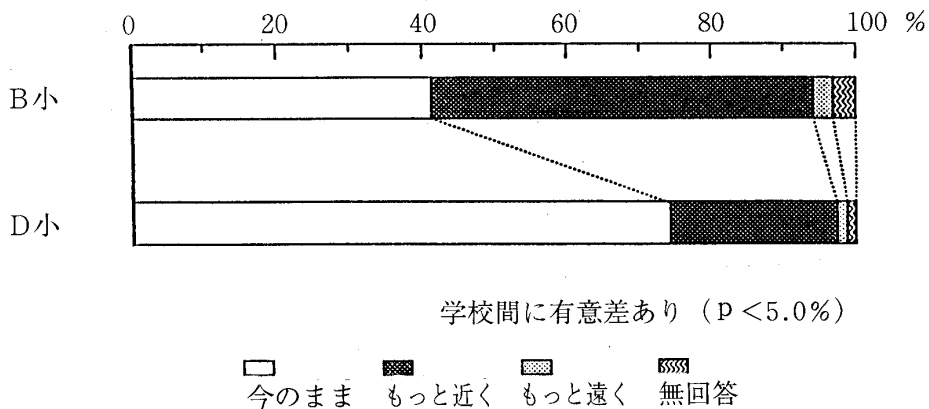


図15 LR と教室の距離

小の教室からLRの距離（平均75m）がD小の距離（平均約35m）より長いため、B小で「もっと近く」の要望が増加したものと考えられる。すなわち、児童の距離に対する意識は、実際の物理的距離に直接規定される傾向が強い。

LRでの食事回数の希望は（図16）、A、B、D小いずれも「もっと多く」や「今くらい」と答えた児童が8割程度と多い。今より「もっと少なく」と回答した児童は、いずれの学校でも1～2割程度に過ぎない。LRでの食事を希望する児童の多いことが示されるが、特に現行の食事回数が少ない学校での希望が高く表れている。

LRでのペア会食の楽しさの程度については（図17）、A、B、D小のいずれも「楽しいと思う」とする児童が6割以上を占めている。A、B、D小のうち、B小の児童だけはペア会食の経験が全くないが、それでも想像によって「楽しいと思う」の回答が多く、LRの有効な使用方法を示唆するものとして注目される。

教室やLR以外の給食を食べたい場所についてみると（図18）、A、B、D小のいずれも「校舎の屋上」を挙げた児童が6～9割と最も多く、「運動場」は2割以下と少ない。「校舎の屋上」は、眺望が良く、開放的な雰囲気醸し出す場所であることから、児童の要望もその点に集中したものと考えられる。食事空間を考える場合、必ずしも室内でなければならないという必然性はない。むしろ、現状ではあまり利用されていない屋上のスペースを積極的に有効活用していく方法の1つとして見直す必要のあることが指摘される。LRで一緒に食べる人数の希望をみると（図19）、A、B、D小とも児童の7～8割は「数人」あるいは「1クラス」までの人数で会食することを希望している。特にA小を除くB、D小では、数人程度の小グループによる会食希望が半数を超えている。A、B、D小の児童は、いずれも同一学年や全学年での交流会食の経験がなく、それが多人数による合同会食の希望を少なくしている一因と推測される。

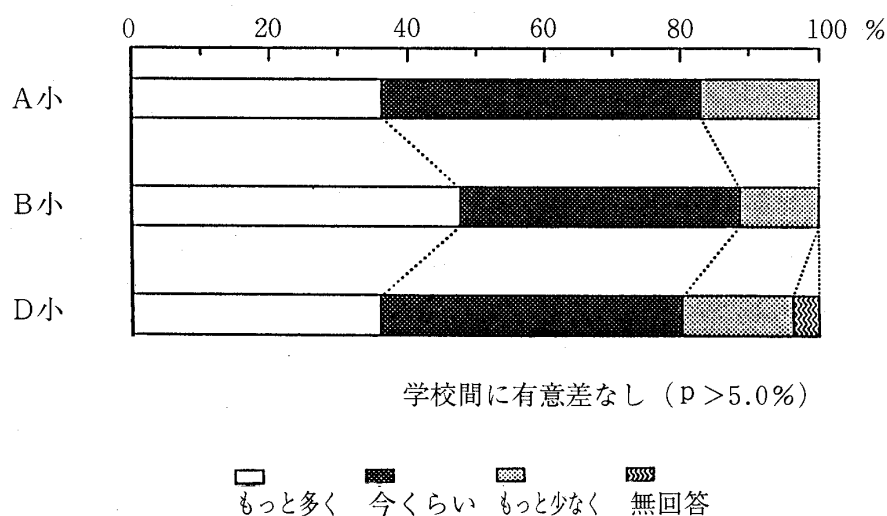


図16 LRでの食事回数

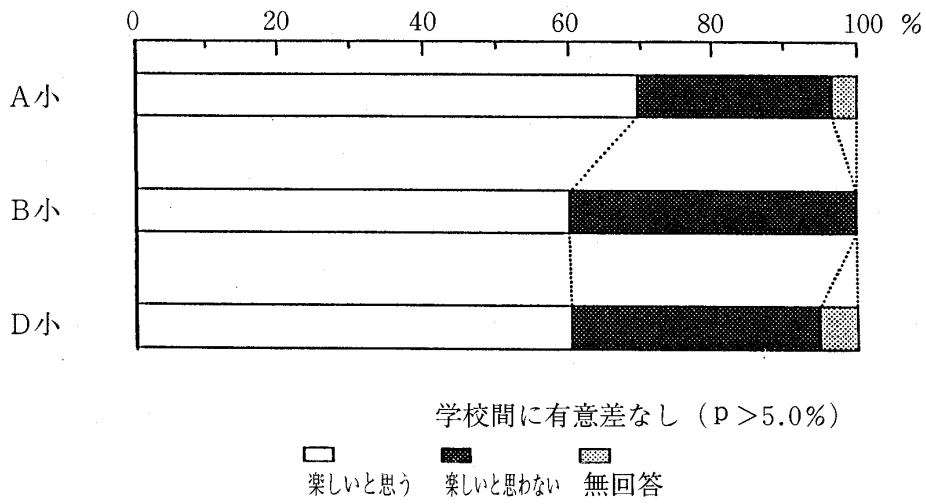


図17 LRでのペア会食の評価

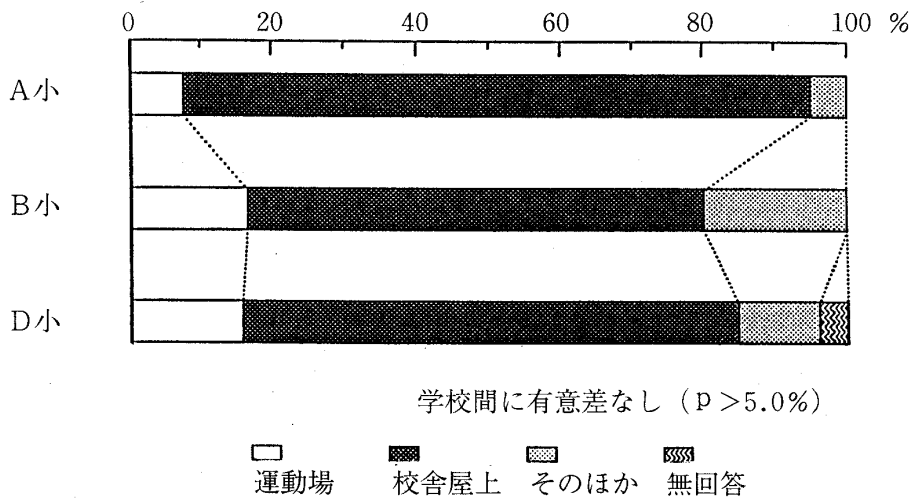


図18 給食を食べたい場所 (教室, LR 以外)

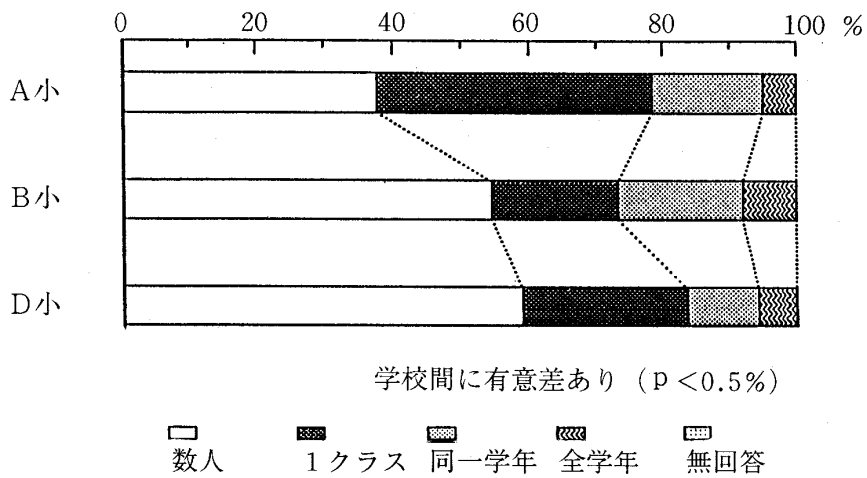


図19 LRで一緒に食べる人数の希望

(2)全小学校の比較 (LRのない学校を含む)

給食時間の長さについては(図20), A小では「短い」と回答した児童は3割弱と少ないが, B, C, D, E, F小では40~55%の範囲に増加する。これはA小のみ給食時間が50分であり, 他の小学校より5分間ほど長い(B~F小とも45分)。この差異が, A小の給食時間の評価に影響していると考えられる。しかし, いずれの小学校でも「短い」とする児童が少なからず存在するため, たとえば給食の準備や後片付けに要する時間を短縮するなど改善の余地が残されている。

LRのないE, F小に対して, 児童のLRの設置希望をみると(図21), 「希望する」と回答した児童が6割前後と多い。LRで食事をする具体的な体験イメージに基づく回答ではないにしても, 学習室空間とは雰囲気異なる空間での食事を望んでいる傾向が伺える。

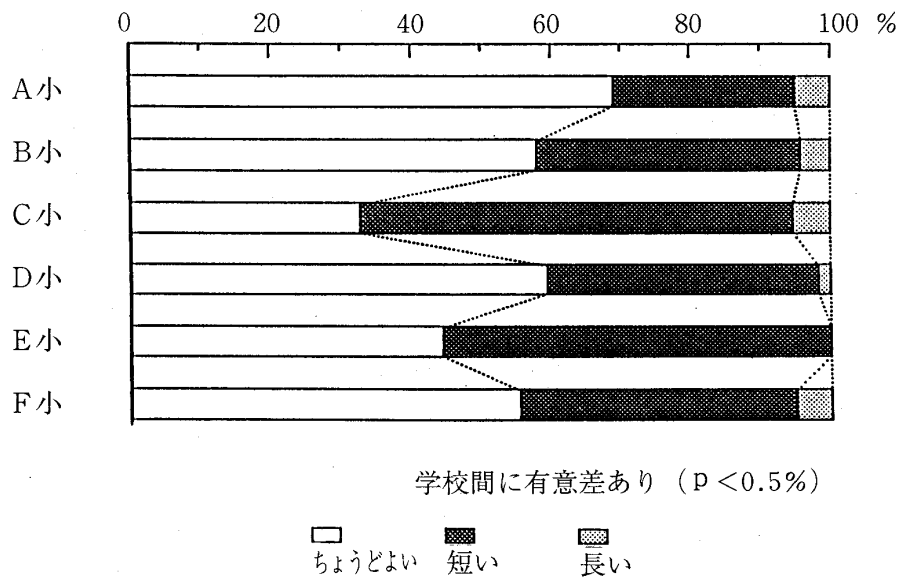


図20 給食時間の長さ

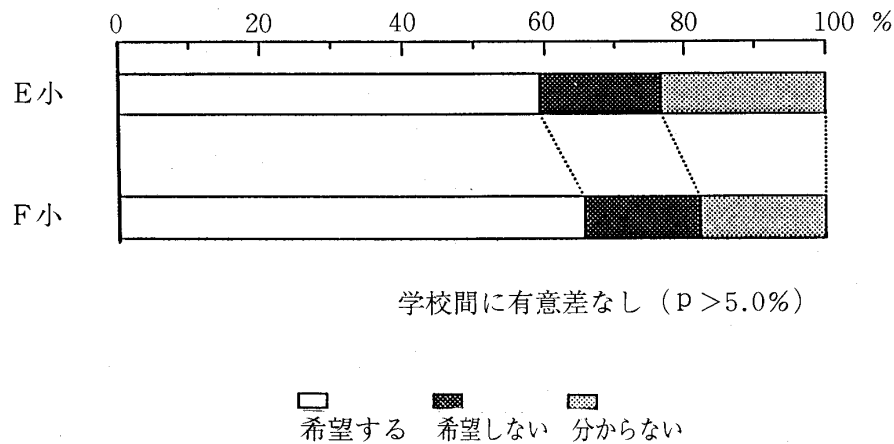


図21 LRの設置希望

4. 要 約

名古屋市内の小学校のなかで、専用のLRを有する学校4校とLRを持たない学校2校の5, 6年生を対象に食事環境やLRに関するアンケート調査を実施した。

LRの広さは、学校によって「狭い」と感じている児童が2～4割占めており、特に普通教室1室分の広さしかない学校のLRへの狭小感が高い。LRの内装および照明デザインは、改修の程度が小さい学校の場合には児童の評価が低く表れる傾向にある。また、テーブルやイスも同様に、LR用に新規に整備しなかった学校では、児童の評価が低い。配膳室は、特にそれを所有している学校で評価が高いが、これは配膳室の利便性を実感しているためと考えられる。LRでの食事回数は、特に平均利用回数の少ない学校で増加を希望する児童が多い。

LRと一緒に食べたい人数の希望は、数人から1クラス程度が多く、少人数での会食指向が伺える。給食時間の長さは、45分（一部の学校では50分）を短いと感じている児童が比較的多い。

現在、LRのない学校ではLRの設置を希望する児童が多い。

第一報で報告したLRの施設整備や利用形態の現状および児童のLRに対する評価や希望を踏まえ、LRの位置、規模、内装、照明、設置設備を十分検討し配備することが要求される。

謝 辞

本稿をまとめるにあたり、調査にご協力や助言を頂いた各小学校長はじめ、諸先生および名古屋市教育委員会事務局の皆様のご厚意に深く感謝致します。

参考文献, 資料

- 1) 宮崎幸恵, 鈴木博志, 名古屋市の小学校におけるランチルーム 1. 施設整備および利用形態について, 東海学園女子短期大学紀要32号, 1997.